



2009年度 一日研修会の開催

2009.11.23 10:00~16:00 於：北11条教会

講師 京都司教 パウロ大塚喜直

今年度の一日研修会は、京都教区の大塚司教様を講師に迎え「**共同宣教司牧について、京都教区のあゆみ**」と題する講演と、昼食休憩をはさんで午後からは小グループによる分かち合いを行い、司教司式のミサで日程を終えました。参加者は約100名でした。



大塚司教様は1997年に42歳で京都司教に任命され、以来、福音宣教する共同体づくりを目指してさまざまな改革にリーダーシップを発揮しています。

講演では、前段で共同宣教司牧の現代的意義と信徒の役割について説明し、後段は京都教区での取り組みと今後の課題について話されました。分かち合いは「**自分たちは何ができるか**」を主題にブロック毎に小グループを編成して行いました。札幌地区の新たな宣教司牧推進に向けて実りある研修会となりました。

講演要旨

共同宣教司牧は共同司牧に**宣教**を加えている。これは全世界的に起こっている司牧の形態。司牧というと司祭が囲いの中で世話をするというイメージが強いが、私たちは社会に福音宣教するために集められたのだから**宣教が一番大事**になる。宣教のために司牧がある。

1 共同宣教司牧の本質

共同宣教司牧とは三位一体からくる「交わりの教会論」に根拠をもつもので、司祭が減ったことによる取り組みではなく、教会の本来の姿に立ち返ること。その目的は福音宣教する共同体づくりであり、そのために共同（協働）することが必要。

2 共同宣教司牧での信徒の役割

信徒はキリストの「祭司職、預言職、王職」に与る使徒職を実行し、救いの働き手となる。司祭の手助けではなく、主体的に独自・得意分野（世俗性）で社会の福音化を目指す。

3 教会活動の条件

- ①ビジョン 福音宣教のためのビジョンを持つ。
→優先順位必要（宣教、養成、社会等）
- ②動機 福音を生きる動機を持つ。
→洗礼の恵み、選びと派遣の確認
- ③方法 福音宣教の具体的方法を考える。
→祈り、学び、分かち合い、生活に

よる証し、奉仕、宣教活動等

- ④組織 上記の3つを支える組織に変える。
→共同宣教司牧、小教区評議会、部
会制

4 共同宣教司牧と「新しい福音宣教（ヨハネ・パウロ2世）」

- ①新しい熱心 共同宣教司牧の理解と意欲
→神の民全員が福音の担い手、聖霊
に聞き従う
- ②新しい方法 布教方法の刷新
→信頼を得る福音の宣言、対話・協
力の時代、謙虚に学ぶ
- ③新しい表現 社会の福音化のために現代社会の課
題に対する新たなアプローチ

5 京都教区のこれまでの取り組み

京都教区は1府3県に56小教区14の共同宣教司牧
ブロックで32人のブロック担当司祭と5人の協力司
祭を任命している。教区には主任司祭と呼ばれる司
祭はいない。1991年から徐々にブロック化をすすめ
2001年に現体制となる。司祭給与制の導入、修道会・
宣教会との契約見直し（人事権）を行い、2001年司
教年頭書簡で共同宣教司牧について説明した。毎年
の司教年頭書簡でその年の教区の活動テーマを明ら
かにし、司教が毎年各ブロックを訪問する。各ブロッ
クから信徒の代表を招集し「共同司牧推進チーム」
を設置し信徒の啓発活動などを行う。また、「ブロッ
ク宣教司牧計画」の作成と年度評価報告、ブロック
会計の設置など組織・運営面での体制も充実させ
た。

共同宣教司牧は信仰改革である。共同司牧によっ
て司牧サービスが低下することに対して信徒から不
満が出る。ある意味これまでの信仰教育はそういう

面があったが、自分が救われることだけの信仰から
脱却しなければならない。信徒の意識が変わらなけ
れば共同宣教司牧は成り立たない。自分の信仰を見
つめ直さない限り教会に力もお恵みもない。

10年間やってきて浸透した面もあるが、司祭の高
齢化・減少、小教区の統廃合など現実的な問題もあ
る。だからこそ、教会は数ではなく、大きさでもな
く、福音宣教していく意気込みが大切だと思う。そ
れを引き出すために「みことばの分かち合い」が効
果がある。

6 今後の課題

司祭間の理解と協力の充実・司祭の共住、信徒の
信仰養成、みことばの分かち合いの習熟、リーダー
になる信徒の養成、社会への福音宣教の具体的な活
動、青少年の育成、子供の信仰教育など課題は多い
が、どこの教区でも同じような方向に進んでいる。
はじめは信徒の不満や司祭の無理解があったが、続
けているうちに時代の要請と感じられるようになった。
新しい教会づくり、新しい司祭像、新しい信徒
像、新しい司祭と信徒の関係、教会が誰のために何
のためにあるのかという存在意義や宣教への意識改
革が進んできていると思う。



分かち合い

大塚司教様からは、まず大前提として、一人ひとりが神の呼びかけに応え、カトリック教会を通して福音を「信徒ではない人々」と「後の世代の人々」に伝えることを選んでいるかどうかを確認し、次に具体的な3つのテーマ(教会、信徒、共同宣教司牧)について分かち合うよう提案され、ブロック毎に小グループを編成して一つテーマを選び分かち合いました。



○主な分かち合いの報告

テーマA「教会について」…教会とは、役割、目的、周辺地域における意義など

- ・ これまでは司祭中心、秘跡中心で共同体の交わりが少なかった。
- ・ 共同体での生き生きとした交わりが少なく、信仰の喜びが伝わらない。
- ・ 個人では良い活動をしていても共同体で分かち合われていない。
- ・ 福音宣教のために組織や体制づくりに時間と労力をかけ過ぎて肝心の行動が弱い。
- ・ 教会員として外の人と交わることにより、教会の姿を知らせることができる。
- ・ 福音宣教を主眼として教会の活動を再構築していく必要がある。
- ・ 開かれた教会になるためには、まず自分の心を開くことが大切。
- ・ バザーを周辺地域に広く呼びかけた結果、大盛況で地域に教会が認識された。

テーマB「信徒として」…教会での役割、社会における役割、動機と方法など

- ・ みことばの分かち合いの大切さを再認識した。
- ・ 本音で語り合える場を教会の中につくりたい。
- ・ 職場でキリスト者であることを表明し、意識して勤務する。
- ・ 人の導きによって洗礼の恵みをいただいた。今度は私が導きたい。

テーマC「共同宣教司牧の理解について」…ブロック制の目的、活動、信徒の意識改革

- ・ 新しいブロック制について信徒の理解が不足している。
- ・ 西ブロックで合同堅信式を行い、とてもよかった。
- ・ 東ブロックは活発に活動しており、小教区同士で協力しようという意識が高い。

2009 札幌 ～ひとつになって

女性の集い 11月28日・29日

会場；北広島クラッセホテル

“インマヌエル” 共におられる神は、いつもわたしたちに寄り添い、固い心を解放してくださる方です。こころも体もほどけた二日間でした。「研修や修養を目的とするよりも、くつろいだ雰囲気での自由な語らいや交流を主眼とする」というこの会の趣旨を真に理解し、大いに楽しんだ私たちでした。

「地区割りの再編成、女性運営委員長の選出、日常の掃除に参加する男性、信徒による勉強会や分かち合いなど、『一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシャ人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、』男であろうと女であろうと、『皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊を飲ませてもらった』から、しばしば意見の衝突はあっても分裂することなく、試行錯誤しながらもよりよい方向を求めて歩んでいる小野幌教会」の姿を確認することもでき、大いなる収穫でした。

(小野幌教会 益田 英子)



地区共同体として意識を培います。研修や修養を目的とするよりも、くつろいだ雰囲気の中での自由な語らいや交流を主眼とします。との呼びかけに出席してみる事にしました。会場は樽前山や恵庭岳が一望できる北広島のホテルです。10地区とマリア院から33名の方々が一堂に会しました。始めに勝谷神父様が「教会に於ける女性の役割は」と提案なさいました。そして又教会に対する“怒り不満”とおっしゃったのはちょっとびっくりです。少数のグループに別れ意見を交したのです、大きな教会、小人数の教会で事情は異なるけれど、今



女性は教会の大きな屋台骨の一つになりつつある、男性にもっと仕事を受け持ってもらいましょうよ、例えばお掃除等も、もっとお父さん達にいきいきしてもらおう為に声をかけようよ、役は男女を問わず適任者になると良い、お父さん達と共に手を携えて一緒にやろうよと若い人達は活発な意見を投げかけます。その後自由時間を置いて夕食、ハッピーアワーとなりました。その合間に討論した事を発表するという事です。

白く雪を頂いたなだらかな山々、平常の生活からちょっとぬけ出した高揚した気持、「大波のように神の愛が」を歌い段々と盛り上がって来ます。勝谷神父様の美声に酔い、カナの婚礼ゆかりの上杉ぶどう酒に酔い、和気あいあいの内に夜は更けてゆきました。

翌日は私にとって初めての北広島教会のミサです。知らなかった方々と共に与るミサ、何かワクワクして来ます。透明な光の中の教会は趣きのある教会です。今日の福音の「人の子が大いなる力と栄光を帯び雲に乗って来る、身を起して頭をあげなさい」とあります。

新鮮で楽しかった「女性の集い」を心にとめ、明日から又一步一歩あゆんでいきたいと思えます。

勝谷地区長からの提言「教会における女性の役割を、怒りという感情を通して見つめ直し、よりよい方向を見いだすために何をすべきかを考えてほしい」

(岩見沢教会 飯塚 慶子)



地区交流会

福音を伝えよう～

男性の集い 1月16日・17日

会場；北広島クラッセホテル

札幌地区での初めての取り組みである地区交流会（男性の集い）が12小教区24名の参加で開催されました。遠く倶知安・新田教会からの参加もありましたが、市内中心部の大きな教会の参加者が少なく、女性の集いよりも10名ほど少ない人数でした。

日程では、はじめの2時間で自己紹介・上杉師から提言・分かち合いとなっていましたが、各自が信仰体験や思いなどを自由に語ったため、自己紹介だけで2時間近くかかりました。しかし、不思議なことに延々と続いた自己紹介が各々の信仰告白となり、かえて集いの一体感が生まれました。思いがけない展開となりましたが、上杉師は「これも聖霊の導き」として、時間を延長して提言と分かち合いを行いました。

上杉師は、小教区で苦勞しているのも同士がよく知り合い支え合うことが大切で、日常生活レベルで交流し友情を育むために、この集いを続けていきたいと話されました。また、信徒は洗礼によってキリストを着る者とされたのだから、社会にキリストを運ぶことが使命であり、そのための男の役割について本音で話合っほしいと呼びかけられました。

次に、日曜日のヨハネ福音書（カナの婚礼）について二人一組で分かち合いました。上杉師からは、福音の解釈や感想ではなく主が自分に何を語りかけているのかに留意するよう指導があり、短い時間でしたがよい分かち合いができました。

夜の交歓会も一致した流れの中で、兄弟として恵みの時を共有しました。信仰について本音で話し合える喜びが溢れ、信仰の証しスピーチが止まらず、即興の寸劇もあり、時間もかなりオーバーして従業員の方々には迷惑をかけたが、最後はサルベ・レジナを唱和して終わりました。翌朝は記録的な豪雪で駐車場の車もすっかり埋まってしまい、掘り出すのに大変な目に遭いながら北広島教会のミサに参加し、今後の協力・交流を約束して散会しました。

私たちはよく「うちの教会」「よその教会」と言いますが、その言葉には内向きの響きがあります。本来、教会は社会に向かって開かれたもので、信徒の関心が内側に向いて安定を指向する時、教会の活力は失われていきます。新しい時代を迎えた今、札幌地区の教会はひとつになって社会に向かって福音を宣言する時です。それは大がかりな運動を組織することではなく、一人ひとりが日常生活の中で自分にできることから始めることです。この交流会で多くの人と本心からの分かち合いができました。教会の垣根を越えるということは自分の中に作ってしまっている壁を越えることに通じるものだと感じています。共同体には力がありますし、聖霊に生かされている人はたくさんいます。支え合い、与え合うことの大切さを実感した集いでした。来年は皆さん参加しましょう。

（山鼻教会 能町 浄彦）



講演交流会

テーマ 【エイズとともに生きるって どういうこと?】

●講師：前川 勲氏 [内科医/免疫学・感染症学 (エイズ等)]

12月1日は「世界エイズデー」でした。(12月はエイズ月間)正しい知識を知って、エイズウイルス(HIV)感染を予防し偏見をなくするための啓発とイベントが、札幌各所で開かれましたが、家庭部会ではさきがけること10月24日(土)山鼻教会にて、前川勲氏を講師に迎え『エイズとともに生きるって、どういうこと?』というテーマで講演交流会を致しました。参加者20名。

「エイズの問題がかなり身近な問題とわかりました」「患者さんの“あたりまえに生きたい”この言葉の中に心の痛みと叫びを感じます。」などの感想が寄せられました。それぞれにHIVを考えるよい機会となりました。

エイズを知ろう

「HIV」というウイルスで引き起こされる病気をAIDS(エイズ)という。Hは人間、Iは免疫力(この場合は免疫不全)、Vはウイルスの意。HIVが濃厚に含まれる体液は、血液、精液、膣分泌液、母乳である。

HIVは熱や石鹼水に弱くすぐに感染力を失ってしまう。しかし、感染後は、免疫機能(抵抗力)を少しずつ破壊していき、5~10年後にエイズを発症するにいたる。

免疫力が低下してゆくと、様々な細菌によって病気の症状が現れる。いわゆる「日和見感染症^{ひよりみ}」の発症である。

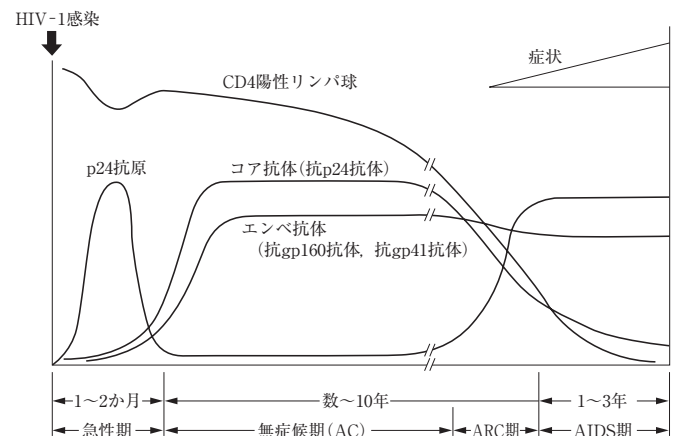
HIVに感染している母親から生まれる子供の30%は、感染ベビーとして生まれる。生後2~5年くらいで免疫不全症になり、殆どが死に至る。母親も急激にエイズ発症に向かう。

活発な性行動を選択する若い世代に必要な情報が伝わり、無知ゆえに病気になって死ぬことのないように、家庭教育の重要性を再認識する必要がある。

タイ北部で山岳民族の少女たちが人身売買され、エイズをうつされ苦しんでいる様子を視察してきたが、再起をねがい手に職をと民族人形製作を支援するボランティア団体や、病気をうつされ治療を必要とするための医療奉仕のボランティアが欧米からも入り、支援活動を展開している。教育資金送金なども随時行っている。



心のコモった手づくりキルト
エイズベビーの為にアフリカ等各地へ送ります



HIV-1 感染症の経過

家庭部会講演会

テーマ「自殺者から見た日本社会の歪み」

●講師 森 一弘司教（東京教区）

2010年1月24日（日） 14:00～ 北11条教会 参加者200名
共催 札幌カリタス・高齢者部会 後援 カリタス家庭支援センター

自殺者の統計をみると特に50代～60代の男性が多い。人生を一生懸命生きてきた世代である。仕事で毎日帰宅が遅くなり、いつのまにか家族とのつながりが希薄になってきている。（1980年代に男性に向けられたひどい言葉。ぬれ落葉、ゴンドラ）居場所がない孤独である。

第2の人生、第3の人生を支える人生哲学がからっぽ。

自殺で肉親を突然失った遺族も大きな十字架背負い深く傷ついている。

貧しい後進国から見れば豊かで安全な国であると称讃される日本。しかし「世界で一番不幸で悲しい国である」と司教様は言われる。どうして—？ 12年間、年間自殺者3万人（自殺未遂はその20倍といわれる）。15～34歳の自分の人生を創っていく時期の人が100万近く、学校、職場に行くことが出来ず引きこもっている。うつ病も急増している。

日本社会がこのような悲しい世界になった原因はどこにあるのか？

◆背後にある日本社会の歪み

- ① 経済的な豊かさの中で育った青少年の空虚感
「いいマンション、いい車を持ち、美味しい物を食べたい、お金がないとみじめだ」お金と幸せを結びつけてしまう。からっぽの箱ものを築き、いざとなるとなにもない。自分を支える考え、ビジョンがない。
- ② 地域共同体の衰退
- ③ 家族共同体の求心力の低下
良い学校に入り良い職に就く、そのための目的達成の世界は一人ひとりの身の置き場がない。
女性の意識の変化 夫や子どもを待っている存在でいたくない。
- ④ マスメディアから送られてくる情報のシャワーのもとで
- ⑤ 経済発展を最優先する国の方針に括られ、操られて
 - 教育制度：教育の再生、きめ細かな教育をするために教師の採用を増やす→文部科学省が拒否
 - 福祉予算のカット
 - 派遣切りの背後にある国の決断：特にバブルがはじけての日本経済の立て直しのため、国際社会に勝つために取った手段は大企業の保護、赤字を減らすためのリストラ、雇用形態の変化それによる派遣切り。儲けられない人、能力のない人、ついてこれない人は自己責任。貧しい人はどんどん貧しくなる。落ちこぼれた人を誰が守るか？

◆人間への回帰……人に戻る、人に出会う、人に交わる、人とともに生きる

人間の根源的欲求

- ① 柔らかで、とげのない、あたたかなものに包まれたい
- ② かけがえのない存在として肯定されたい
- ③ 人に触れたい、心に触れたい
- ④ 可能性を開花したい、自分らしく生きたい

キリストが人類に最初に言った言葉は「幸い」
私達人間が心の底から自然にのぞんでいるものは「幸せになりたい」ということ。自分はどんなに苦勞しても構わないが子供だけは幸せにしたい。誰かを幸せにしてあげたい……まさにキリストはこのためにこられた。「幸せになるためにはこういう道があるよ」と教えるためにこられた。私たちはキリストのメッセージを見直し人間の幸せの原点に帰ろう。

御多忙の中、厳寒の札幌にいらして下さった森司教様、お世話になった北11条教会の皆様にご感謝申し上げます。



日本二十六聖人殉教者 祝日（2月5日） トマス小崎 母への手紙

京都から長崎の西坂まで連行される途中、広島の上原で、14歳のトマス小崎は見張りの役人の目を盗んで、つぎのような別れの手紙を母に書いています。

「神のお恵みに助けられながら、この手紙をしたためます。

私たちパードレさま以下二十三名のものは、列の先頭をいく制札に書かれた宣告文にありますように、長崎で十字架につけられるため、ここまでまいりました。私のこと、またミゲル・父上のこと、なにひとつご心配くださいませんように。パライソ（天国）ですぐお会いしましょう。お待ちしております。たとえパードレがいなくとも、臨終には熱心に罪をくいあらため、イエズス・キリストの多くのお恵みを感謝なされば、救われます。この世は、はかないものですから、パライソの満ちあふれた幸せを失わないよう、努力なさいますように。

ひとからどんなに迷惑をかけられても、どんなに貧しくとも耐えしのび、すべての人たちに大なる愛と徳をほどこされますように。なによりもふたりの弟、マンシオとフェリッペが信仰を失わないようにお導きくださることが、第一のお願いでございます。

私は弟たちのために、天主さまにお祈りいたします。また天主さまが母上のことをお守りくださることをお祈り申し上げます。母上から私の知っている人たちによろしく申しあげてください。自分たちの犯したあらゆる罪をくいあらためることを忘れぬよう、ふたたび重ねて申し上げます。なぜなら、それがただひとつの重大なことですから……」

「二十六の十字架」 谷 真介 著（女子パウロ会）より引用

はりつけのままさらされていた遺体の中から、記念となるものを探したところ、父親であるミカエル小崎のふところから、一枚の御絵と手紙が出てきました。手紙には涙の跡と血の跡がついておりました。涙はトマス小崎が獄中でこの手紙を書いている時のもの、血は父親のミカエル小崎が槍を受けた時のものです。

2ヶ月間、十字架につけられたままさらされた遺体はくさることなく、野鳥もまったく寄りつかず、それどころか顔はあたかも生きていたように光り輝いていたということです。

京都市下京区にある「フランシスコの家」を訪れました。ここは26聖人ゆかりの地、南蛮寺跡です。

日本に派遣されたペトロ・パプチスタ神父とフランシスコ会士たちは、秀吉から与えられた京都の寺跡の土地に修道院を建て、その一部をルソン使節館としました。

また、通りに面して教会を建て、京都では初めての西洋式病院を二つ開設し、当時見捨てられていたハンセン病患者や貧しい病人を収容し世話をしました。

修道院近くには、200名以上のキリシタンが移り住みました。都の人々は、教会を「南蛮寺」この町を「だいうす町」と呼び、自分達は「諸天使の元後の町」（ロス・アンジェルス）と呼んでいました。その修道院・病院・教会の跡が、ここ「フランシスコの家」と周辺です。

フランシスコの家では京都キリスト教史文化資料館が併設され、踏み絵やマリア観音など、そのほかさまざまなキリシタン関係の文献・資料・遺品を見ることができます。

その中に、トマス小崎の手紙が原文で貼られてありました。かつて子供向けの本でこの手紙を読み、衝撃を受けたことを思い出し、日本26聖人殉教者の祝日（2月5日）が近いこともあり、ご紹介させていただきました。



編集後記

新年あけましておめでとうございます。

昨年11月に札幌地区交流会女性の集い、そして今年の1月には男性の集いが開催されました。

忙しい中参加していただき感謝しております。

お互い気楽に話し合いながら有意義な時間を過ごすことが出来ましたこと本当に嬉しく思います。

一人一人が輝いていける社会になるよう願っています。

(N・T)